

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：33912  
 研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：23720296  
 研究課題名（和文） タスク前計画時間が留学前・留学後学習者のスピーキング運用力に与える影響  
 研究課題名（英文） Effects of pre-task planning on oral performance before and after study abroad experience  
 研究代表者  
 新多 了 (NITTA RYO)  
 名古屋学院大学・外国語学部・准教授  
 研究者番号：00445933

## 研究成果の概要（和文）：

外国語スピーキング能力を測定するテストではしばしばタスク前に計画時間が与えられるが、それがスピーキング運用力に与える影響については十分に理解されていない。本研究では、様々な側面からデータを採取、分析することにより、ディスカッション形式のスピーキングテストにおいて、計画時間が与える影響について検証を行った。その結果、計画時間を与えることで話者がしばしばモノログスタイルを取るようになり、本来の目的であるインタラクション能力を十分に測ることができないことがわかった。

## 研究成果の概要（英文）：

The effects of pre-task planning time in speaking tests on performance have not been sufficiently well understood despite its popularity. Using a multifaceted approach including analysis to extend the process of performance, the aim of this research is to investigate the effect of pre-task planning in a paired format, which has been relatively under-researched. The results from rating scores and discourse analytic measures revealed that planning had limited effect on performance. Conversation analysis, however, identified the possibility of a contrastive mode of discourse under the two planning conditions, raising concerns that planning might deprive test-takers of the chance of demonstrating their abilities of interacting collaboratively.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2012 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
交付決定額	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：第二言語習得論、言語評価

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 計画時間の有無がスピーキング運用力に与える効果についてはこれまで様々な研究が行われてきた。被験者を計画時間のあるグループと無いグループに分け、第二言語運用の様々な側面を数値化し、各グループの平均値を統計的に比較することで、計画時間の与える効果について研究されてきた。一般的には、10分程度の計画時間を与えられると学習者の流暢さ、言語の複雑さの点において改善されることが報告されている。

その一方、第二言語としての英語スピーキングテストでは公平さの観点から、タスクの前に一定の計画時間が与えられることが多いが、言語テスト環境では必ずしも有意な結果が得られないことが報告されている。

(2) タスク研究と言語テスト研究において異なる結果が報告されている理由についてまだ十分にはわかっていないが、第二言語データをグループで扱う認知的アプローチの限界を指摘する研究者も多い。そのような中、近年注目を集めている「オルタナティブ・アプローチ(alternative approaches)」(Atkinson, 2011)では、個々の学習者の個別性と変化に注目する。このアプローチでは、個々の運用について詳細な記述を行い、還元主義的な手法では拾い上げることができなかった小さいが重要な変化に注目する。

過去20年に渡ってタスク研究は大きな進展を遂げ、教室での外国語学習に多くの示唆を与えてきたが、還元主義的アプローチだけでは、十分に説明できない結果も多く報告され、これまでと全く異なる視点であるオルタナティブ・アプローチからの分析の必要性が求められている。

したがって、本研究ではこれまで主に取られて来た認知的アプローチに加え、オルタナティブアプローチの一つである「会話分析」の手法を用いた多面的(multifaceted)アプローチをとることで、言語テスト環境におけるタスク前計画時間のスピーキング与える影響について検証を行った。

## 2. 研究の目的

本研究では、以下の研究課題について検証を行った。

- (1) タスク前計画時間の有無は、英語スピーキング運用に影響を与えるのか？
- (2) タスク前計画時間に対して、学習者はどのように認識するのか？
- (3) 学習者は、計画時間がある場合とない場合で、どのように会話を構築するのか？

## 3. 研究の方法

(1) ①テスト形式による評価スコアの分析：スピーキングテスト評価の経験豊富な2名の英国人研究者にビデオ録画したスピーキング運用を「流暢さ」「複雑さ」「正確さ」の3項目で判定してもらい、結果についてFACET分析を行った。

②第二言語運用分析：採取した発話データをコード化し統計処理(T検定)を行った。先行研究で広く使用されている「流暢さ」、「複雑さ」、「正確さ」を表す指標を用いた。

(2) タスク後アンケートの分析：「認知プロセスに関するアンケート」(Weir et al. 2006)を用い、計画時間中及びタスク中の認知プロセスについて調査し、結果の分析(Wilcoxon Signed Rank Test)を行った。

(3) 会話分析の手法を用い、会話を書き起こした transcripts の分析を行った。

#### 4. 研究成果

(1) ①評価スコアの FACET 分析：「流暢さ」と「複雑さ」において、計画時間有りの際に統計的有意が見られた。

②第二言語運用分析：「流暢さ」と「正確さ」について有意差は見られなかった。一方、「複雑さ」について、計画時間有りの際に「1ターンにおける語数」において統計的有意が見られた。

(2) タスク後アンケートの分析：計画時間なしの際、タスク開始前、学習者は自分の考えが簡単に伝えられると感じる傾向があった（統計的有意差有り）。しかし、計画時間中及び、タスク中には有意差が見られなかった。

(3) 会話分析：計画時間を与えられた場合、相手の発言を十分に聞かないで、それぞれが自分の考えを説明する「モノログモード」が多くのパアで観察された。その一方、計画時間がない場合には、相手の発言を土台に自分の発言を構築する「ダイアログモード」が頻繁に観察された。

本研究結果から、計画時間の有無がスピーキングタスクの運用に与える影響は、言語テスト環境において必ずしも有効ではないことが観察された。特に、計画時間を与えることで、多くの学習者がタスクの本来の目的である「インタラクション能力」を十分に発揮できないことは、今後外国語スピーキングテストを実施する際に重要な示唆を与えてくれる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① Ryo Nitta & Fumiyo Nakatsuhara (in press). A multifaceted approach to investigating pre-task planning effects on paired oral test performance. *Language Testing*. 査読あり
- ② Kyoko Baba & Ryo Nitta (in press). Phase transitions in dynamic development of writing fluency from a complex dynamic systems perspective. *Language Learning*. 査読あり

[学会発表] (計4件)

- ① Kyoko Baba & Ryo Nitta (2013). Phase transitions in development of writing fluency: a longitudinal study from a complex dynamic systems perspective. *American Association for Applied Linguistics, Dallas*. March, 2013.
- ② Ryo Nitta (2012). Dynamic interaction of the Motivational System. *JALT Annual Conference, Hamamatsu*. October, 2012.
- ③ Ryo Nitta & Kyoko Baba (2011). Dynamic effects of repeating a timed writing task. *4th Biennial International Conference on Task-Based Language Teaching (University of Auckland, 18-20 November, 2011)*.
- ④ Kyoko Baba & Ryo Nitta (2011). Effects of Reflection on L2 Writing Development: A Longitudinal Study of Task Repetition From a Dynamic Complex Systems Perspective. *Symposium on Second Language Writing 2011 (Taipei, Taiwan)*.

[図書] (計3件)

- ① Ryo Nitta (in press). Understanding motivational evolution in the EFL classroom: A longitudinal study from a dynamic systems perspective. In M. Apple, D. Da Silva, & T. Fellner (eds.), *Language Learning Motivation in Japan*. Multilingual Matters.
- ② Ryo Nitta & Kyoko Baba (in press). Task repetition and L2 writing development: A longitudinal study from a dynamic systems perspective

(in press). In H. Byrnes & R. M. Manchon (eds.), *Task-Based L2 Language Learning: Insights from and for L2 writing*. John Benjamins.

- ③ Kyoko Baba & Ryo Nitta (2011). Dynamic effects of repeating a timed writing task in two EFL university courses: Multi-element text analysis with Coh-Metrix. In P. M. McCarthy & C. Boonthum-Denecke (eds.), *Applied Natural Language Processing: Identification, investigation, and resolution*. Information Science Reference.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

新多 了 (NITTA RYO)  
名古屋学院大学・外国語学部英米語学科・  
准教授  
研究者番号 : 00445933

### (2) 研究協力者

中津原 文代 (NAKATSUHARA FUMIYO)  
英国ベッドフォードシャー大学・英語学  
習・評価研究所・上級講師 (シニアレク  
チャー)